

## 自分たちでできる国際協力を考えよう

昭和60年から続くアジア・アフリカ難民救済運動

わたしは、〇高校生徒会のアジア・アフリカ難民救済運動の係長です。

本校のアジア・アフリカ難民救済運動は、飢えに苦しむアジア・アフリカの子どもたちを一人でも多く助けるため、家庭で不要になったタオル・手拭い・文房具・食料などを送る活動です。東京にあるボランティア団体を通じて現地まで送っています。

この活動が始まったのは、1985年（昭和60年）でした。当時の3年5組が文化祭で取り組んだのが最初です。「文化祭のなかで、自分たちで何かをやった！という実感を持ちたい。そして、地域や社会に目を向けるきっかけをつかみたい」という思いからだったそうです。それ以来、歴代の3年5組の一大事業として、受け継がれてきました。

ところが、平成9年には、学級減のあおりを受けて、3年5組が消滅してしまいました。そこで、この年から、3学年全体で、この活動を継続していくことになり、わたしがその責任者に選出されたのでした。3学年一人ひとりの協力で取り組みたいと思い、多くの人に理解を求めましたが、最初は、「めんどくさい」という反応がほとんどで、意気消沈してしまいました。それでも、HRなどで地道に訴えていくうちに次第に、学年全体の意識も高まってきました。

まず、係が中心になって、物資回収をお願いするビラと、物資回収時の区割り地図を作ることから始めました。ビラ作りでは、慣れないパソコン操作に四苦八苦しました。また、区割り地図は、思ったより根気のいる仕事で、「もう、やめたい」と何度も思いました。物資回収は、夏休みの日曜日、暑いさなかに行いました。仲間が集まってくれるか、とても不安でしたが、実際には、3年生の半分以上の人が参加してくれ、先生方も含めて〇高校の仲間づくりのすばらしさに、改めて感激したものでした。

次は、物資の仕分けです。現地に送るものと、輸送費捻出のために行うバザーでの売り物とに分ける作業です。今回は新聞記事にも取り上げられたことなどもあって、飯田や上田など広い地域から協力物資が送られてきました。そして、送るものをみかん箱に詰めると、百箱以上になりました。「この物資で少しでも飢えに苦しむ子のためになるように」と祈りつつの作業でしたが、汗まみれの大変な作業でした。

バザー当日は、雨。今度はお客さんが来てくれるか、心配でしたが、タクシーで見える常連の方をはじめ、大変な人の群れ。売上は、輸送費の何倍にもなり、大満足。

秋のある日、救済物資を宅急便に運び込み終わった時には、〇校の仲間・先生そして地域の皆さんの本校への熱い思いを感じて、みんなで思わず抱き合って喜んでしまいました。

U高校のカンボジア支援活動など、高校生のさまざまな活動は、教文通信「シリーズ頑張る高校生（今を生きる高校生）」（教文会議発行）などにも紹介されています。